令和４年３月10日　北日本新聞

不妊症原因の一つ　子宮内膜ポリープ

手術時間わずか30分

新機器で患者負担減

県立中央病院 北信越初

県立中央病院（川端雅彦院長）は、不妊症の原因の一つとされる子宮内膜ポリープを切除する手術に向け、「子宮鏡シェーバー」と呼ばれる新しい機器を導入した。電気メスとは違って使用時に子宮内膜の熱損傷がなく、ポリープ（病変）のみを切除し吸引できる。手術の安全性が向上して日帰り手術も可能となり、患者の負担軽減が期待される。北信越の病院への導入は初めて。

（藤田愛夏）

子宮内膜ポリープは、子宮内膜が過剰に増殖することで子宮の内側にでき、受精卵の着床を阻害する。40代半ばまでとされる「生殖年齢」の女性の1割ほどが発症するが自覚症状はなく、不妊治療や月経異常での受診、がん検診などで見つかることが多い。

子宮鏡シェーバーの使い方を説明する本多副医長＝県立中央病院

県立中央病院産婦人科の本多真澄副医長によると、妊娠を希望する場合や月経異常の改善には、切除が推奨される。

従来の手術では、膣から子宮内に「子宮鏡」と呼ばれる内視鏡を挿入し、先端にある電気メスでポリープを切除する。この機器の外径が約9ミリあるため、使用時には子宮の入り口を広げる処置を伴い、全身麻酔と2泊3日の入院が必要だった。電気メスを使うと正常な子宮内膜にも熱損傷を与える恐れがあり、その損傷自体が不妊症の原因にもなっていた。

導入した子宮鏡シェーバーは、電気メスの代わりにとげ状の突起で病変部分を取り除き、吸引して排出する。外径は約6ミリで、これまでの手術で使っていた機器よりも小さいため、静脈麻酔や局所麻酔で処置が済み、手術時間は30分ほどに短縮。日帰りの外来手術で対応できるようになった。

同病院は2月に手術を始め、今後は年間60例程度の実施を見込む。公的医療保険が適用される。

本多副医長は「治療日数の短縮は、働きながら不妊治療をしている人の負担軽減につながる。不妊治療の成功率向上も期待できる」と話している。